

戀

初戀の心をよめる

371 はるがすみたつたの山のさくらばな おぼつかなきをしる人のなさ

寄鹿戀

372 秋のゝのあさぎりがくれなくしかの ほのかにのみやきゝわたりなん

戀哥」(632)

373 あしびきのやまのをかべにかるかやの つかのまもなしみだれてぞ思

374 わがこひははつ山あるのすりごろも 人こそしらねみだれてぞ思

375 こがくれてものをおもへばうつせみの はにをくつゆのきえやかへらむ

376 かさゝぎのはにをくつゆのまる木ばし ふみゝぬさきにきえやわたらむ」

377 月かげのそれかあらぬかゝげろふの ほのかに見えてくもがくれにき

378 くもがくれなきてゆくなるはつかりの はつかに見てぞ人はこひしき

くさによせてしのぶるこひ

379 秋かぜになびくすゝきのほにはいはず 心みだれてものを思かな

風によするこひ」(64)

380 あだしのゝくずのうらふく秋かぜの めにし見えねばしる人もなし

381 秋はぎの花のゝすゝきつゆをゝもみ をのれしほれてほにやいでなむ

ある人のもとにつかはし侍し

382 なにはがたみぎはあしのいつまでか ほにいでずしも秋をしのばむ

383 かりのゐるはかぜにさはぐ秋のたの「 おもひみだれてほにぞいでぬる

こひの心をよめる

384 さよふけてかりのつばさにをくつゆの きえてもゝのはおもふかぎり

しのぶるこひ

385 しぐれふるおほあきのをざゝはら ぬれはひづともいろにいでめや

神な月のころ人のもとに」⁶⁶こ

386 しぐれのみふるの神すぎふりぬれど いかにせよとかいろのつれなき

こひの哥

387 よをさむみかものはがひにをくしもの たとひけぬともいろにいでめやも

388 あしがものさはぐいりえのうきくさの うきてやものを思わたらん

うみのへんのこひ」

389 うきなみのをじまのあまのぬれ衣 ぬるとないひそくちはゝつとも

390 いせしまやいちしのあまのすてごろも あふことなみにくちやはてなむ

391 あはぢしまかよふちどりのしばくも はねかくまなくこひやわたらむ

こひのうた

392 とよくにのきくのながはまゆめにだに」⁶⁶こ まだみぬ人にこひやわたらむ

393 すまのうらにあまのともせるいさり火の ほのかに人を見るよしもがな

394 あしのやのなだのしほやきわれなれや よるはすがらくゆりわぶらむ

ぬまによせてしのぶるこひ

395 かくれぬのしたはふあしのみごりに われぞもの思ゆくゑしらねば

水へんのこひ

396 まこもおふるよどのさは水みくさゐて かげし見えねばとふ人もなし

397 みしまえやたまえのまこもみがくれて めにしみえねばかり人もなし

あめによするこひ

398 ほとゝぎすなくやさ月のさみだれの はれず物思ころにもあるかな

399 ほとゝぎすまつながらのさみだれに」命しげきあやめのねにぞなきぬる

400 ほとゝぎすきなくさ月のうの花の うきことのはのしげきころかな

なつのこひといふことを

401 さ月やまこのしたやみのくらければ をのれまどひてなくほとゝぎす

こひのうた

402 おくやまのたつきもしらぬきみにより わが心からまどふべらなる

403 をく山のこけふみならすさをしかも ふかき心のほどはしらなむ

404 あまのはらかぜにうきたるうきぐもの ゆくゑさだめぬこひもするかな

くもによするこひ

405 しらくものきえはきえなでなにしかも」⁶⁸ たつたのやまのなみのたつらむ

ころもによするこひ

406 わすらるゝ身はうらぶれぬから衣 さてもたちになこそおしけれ

こひの心をよめる

407 きみにこひうらぶれをれば秋風に なびくあさぢのつゆぞけぬべき」

408 ものおもはぬのべのくさ木のはにだにも 秋のゆふべはつゆぞをきける

409 あきのゝの花のちぐさにもものぞ思 つゆよりしげいろは見えねど

つゆによするこひ

410 わがそでのなみだにもあらぬつゆにだに はぎのしたばゝいろにいでにけり

こひのうた」⁶⁹

411 山しろのいはたのもりのいはずとも 秋のこずゑはしるくやあるらむ

山家のちのあした

412 きえなましけさたづねずは山しろの 人こぬやどのみちしばのつゆ

くさによせてしのぶるこひ

413 なでしこの花におきるあさつゆの たまさかにだに心へだつな」

なでしこによするこひ

414 わがこひは夏のすゝきしげゝれど ほにしあらねばとふ人もなし

あひてあはぬこひ

415 いまさらになにをかしのぶはなすゝき ほにいでし秋もたれならなくに

すゝきによするこひ

416 まつ人はこぬものゆへに花すゝき」初 ほにいでゝねたきこひもするかな

たのめたる人のもとに

417 をぎゝはらをくつゆさむみ秋されば まつむしのねになかぬよぞなき

418 まつよるのふけゆくだにもあるものを 月さへあやなかたぶきにけり

419 まてとしもたのめぬ山も月はいでぬ いひしばかりのゆふぐれのそら」

月によするこひ

420 かずならぬ身はうきぐものよそながら あはれとぞ思秋のよの月

421 月かげもさやには見えずかきくらす 心のやみのはれしやらねば

月のまへこひ

422 わがそでにおほえず月ぞやどりける とふ人あらばいかゞこたへむ」(分)

秋ごろいひなれにし人のものへ

まかれりしにたよりにつけて

ふみなどつかはすとて

423 うはのそらに見しおもかげをおもひいでゝ 月になれにし秋ぞこひしき

424 あふことをくものよそにゆくかりの とをざかればやこゑもきこえぬ

とをきくにへまかれりし人八月」

ばかりにかへりまいるべきよしを申て

九月まで見えざりしかばかの人の

もとにつかはし侍しうた

425 こむとしもたのめぬうはのそらにだに 秋かぜふけばかりはきにけり

426 いまこむとたのめし人は見えなくに あきかぜさむみかりはきにけり

かりによするこひ」⁷²

427 し^レのびあまりこひしき時はあまのはら そらとぶかりのねになきぬべし

こひのうた

428 あまごろもたみのゝしまになくたづの こゑきゝしよりわすれかねつも

429 な^レにはがたうらよりをちになくたづの よそにきゝつゝこひやわたらむ

430 人しれずおもへばくるしたけくまの」 まつとはまたじまてばすべなし

431 わがこひはみやまのまつにはふつたの しげきを人とはすぞありける

432 山しげみこのしたがくれゆくみづの をときゝしよりわれやわするゝ

433 神山のやましたみづのわきかへり いはでもの思われぞかなしき

434 こ^レけふかきいしまをつたふ山水の」⁷³ をとこそたてねとしはへにけり

435 あづまぢのみちのおくなるしらかはの せきあへぬそでをもるなみだかな

436 しのお山したゆくみづのとしをへて わきこそかへれあふよしをなみ

437 もらしわびぬしのぶのおくのやまふかみ こがくれてゆくたにがはの水

438 心をしゝのぶのさとにをきたらば あぶくまがはゝみまくちかけん」

439 としふともをとにはたてじをとがは したゆくみづのしたのおもひを

440 いその神ふるのたかはしふりぬとも もとつ人にはこひやわたらむ

441 ひろせがはそでつくばかりあさけれど われはふかめて思そめてき

442 あふさかのせきやもいづらやましなの をとはのたきのをとにきゝつゝ」⁷⁴

443 いしはしる山したゝぎつ山がはの 心くだけでこひやわたらむ

444 やまがはのせゞのいはなみわきかへり をのれひとりや身をくだくらむ

445 うきしづみはてはあはとぞなりぬべき せゞのいはなみ身をくだきつゝ

こひ」

446 しら山にふりてつもれる雪なれば したこそきゆれうへはつれなし

447 くものゐるよしのゝたけにふるゆきの つもりくてはるにあひにけり

448 春ふかみゝねのあらしにちる花の さだめなきよにこひつゝぞふる

月によせてしのぶるこひ

449 はるやあらぬ月はみしよのそらながら」⁷⁵ なれしむかしのかげぞこひしき

450 思きやありしむかしの月かげを いまはくものよそに見むとは

まつこひの心をよめる

451 さむしろにひとりむなしくとしもへぬ よるのころものすそあはずして

452 さむしろにいくよの秋をしのびきぬ いまはたおなじうちのはしひめ」

453 こぬ人をかならずまつとなけれども あか月がたになりやしぬらむ

あか月のこひ

454 さむしろにつゆのはかなくおきていなば あか月ごとにきえやわたらむ

あか月のこひといふことを

455 あか月のつゆやいかなるつゆならん おきてしゆけばわびしかりけり」 762

456 あか月のしぎのはねがきしげゝれど などあふことのまどをなるらん

人をまつ心をよめる

457 みちのくのまのゝかやはらかりにだに こぬ人をのみまつがくるしさ

458 まてとしもたのめぬ人のくずのはも あだなるかぜをうらみやはせぬ

こひの心をよめる」

459 秋ふかみすそのゝまくずかれぐゝに うらむるかぜのおとのみぞする

460 あきのゝにをくしらつゆのあさなく はかなくてのみきえやかへらむ

461 かぜをまついまはたおなじみやぎのゝ もとあらのはぎのはなのうへのつゆ

きくによするこひ

462 きえかへりあるかなきかにもぞ思おも うつろふ秋のはなのうへのしも

463 花により人の心ははつしもの をきあへずいろのかはるなりけり

ひさしきこひの心を

464 わがこひはあはでふるのゝをざゝはら いくよまでとかしものをくらむ

古郷こひ

465 くさふかみさしもあれたるやどなるを つゆをかたみにたづねこしかな

466 さとはあれてやどはくちにしあとなれや あさちがつゆにまつむしのなく

467 あれにけりたのめしやどはくさのはら つゆのゝきばにまつむしのなく

468 しのぶぐさしのびゝにをくつゆを 人こそはねやどはふりにき

469 やどはあれてふるきみやまのまつにのみ とふべきものとかぜのふくらむふらむ

としをへてまつこひといふことを人く

におほせてつかうまつらせしついでに

470 ふるさとのあさぢがつゆにむすぼゝれ ひとりなくむしの人をうらむる

ものがたりによするこひ

471 わかれにしむかしはつゆかあさぢはら あとなきのべに秋かぜぞふく

冬のこひ」

472 あさぢはらあとなきのべにをくしもの むすぼゝれつゝきえやわたらむ

473 あさぢはらあだなるしものむすぼゝれ 日かげをまつにきえやわたらん

474 にはのおもにしげりにけらしやへむぐら とはでいくよの秋かへぬらむ

古郷こひ

475 ふるさとのすぎのいたやのひまをあらみ」あこ ゆきあはでのみとしのへぬらん

すだれによするこひ

476 つのくにのこやのまろやのあしすだれ まどをになりぬゆきあはずして

こひの哥

477 すみよしのまつとせしまにとしもへぬ ちぎのかたそぎゆきあはずして

478 すみのえのまつことひさになりけり こむとたのめてとしのへぬれば」

479 おもひたえわびにしものをいまさらに のなかのみづのわれをたのむる

480 をじかふすなつのくさのつゆよりも しらじなしげき思ありとは

481 きかでたゞあらまし物をゆふづくよ 人だのめなるおぎのうはかせ

たなばたによするこひ

482 たなばたにあらぬわが身のなぞもかく」 802 としにまれなる人をまつらむ

こひのうた

483 わがこひはあまのはらとぶあしたづの くもるにのみやなきわたりなむ

484 ひさかたのあまのかはらにすむたづも 心にもあらぬねをやなくらむ

485 ひさかたのあまとぶくものかぜをいたみ われはしか思いもしあはねば」

486 わがこひはかごのわたりのつなでなは たゆたふ心やむ時もし

こがねによするこひ

487 こがねほるみちのくやまにたつたみの いのちもしらぬこひもするかも

488 あふことのなきなをたつのいちにうる かねてもの思わが身なりけり

雪中まつ人といふことを」(81)

489 けふも又ひとりながめてくれにけり たのめぬやどのにはのしらゆき

こひのうた

490 おくやまのいはがきぬにこのはおちて しづめる心人しるらめや

491 おく山のすゑのたつきもいさしらず いもにあはずてとしのへゆけば

492 ふじのねのけぶりもそらにたつものを などかおもひのしたにもゆらむ」

493 おもひのみふかきやまのほとゝぎす 人こそしらねゝをのみぞなく

494 名にしおはゞその神山のあふひぐさ かけてむかしを思いでなむ

495 なつふかきもりのうつせみをのれのみ むなしきこひに身をくだくらむ

496 おほあらきのうきたのもりにひくしめの」(82) うちはへてのみこひやわたらむ

497 それをだにおもふことゝてちはやぶる 神のやしろにねがぬ日はなし

498 ちはやぶるかものかはなみいくそたび たちかへるらむかぎりしらずも

499 なみだこそゆくゑもしらねみわのさき さのゝわたりのあめのゆふぐれ

500 しらまゆみいそべの山のまつのはの」 時はにものを思ころかな

501 しらなみのいそらがちなるとせがは のちもあひ見む身をしたへずは
 502 わたつうみにながれいでたるしかまがは しかもたへずやこひわたりなむ
 503 きみによりわれとはなしにすまのうらに もしをたれつゝとしのへぬらむ
 504 おきつなみうちいではまのはまひさぎ しほれてのみやとしのへぬらん」 83
 505 かくてのみありそのうみのありつゝも あふよもあらばなにかうらみむ
 506 みくまのゝうらはまゆふいはずとも おもふ心のかずをしらなむ
 507 わがこひはもゝしまめぐるはまちどり ゆくゑもしらぬかたになくなり
 508 おきつしまうのすむいしによるなみの まなくもの思われぞかなしき」
 509 たごのうらのあらいそのたまもなみのうへに うきてたゆたふこひもするかな
 510 かもめあるあらいそのすさきしほみちて かくろひゆけばまさるわがこひ
 511 むこのうらのいりえのすどりあさなく つねに見まくのほしきゝみかも」 84

旅

512 たまほこのみちはとをくもあらなくに たびとしおもへばわびしかりけり

513 くさまくらたびにしあればかりこもの 思みだれていこそねられね

514 たびごろもたとかたしきこよひもや くさのまくらにわがひとりねむ」(86)

羈中夕露

515 つゆしげみならはぬのべのかりごろも ころしかなし秋のゆふぐれ

516 のべわけぬそでだにつゆはをくものを たゞこのごろの秋のゆふぐれ

517 たび衣うらがなしかるゆふぐれの すそのゝつゆに秋かせぞふく」

羈中鹿

518 たびごろもすそのゝつゆにうらぶれて ひもゆふかせにしかぞなくなる

519 秋もはやすゑのはらのになくしかの こゑきく時ぞたびはかなしき

520 ひとりふすくさのまくらよるのつゆは ともなきしかのなみだなりけり」(86)

旅宿月

521 ひとりふすくさのまくらのつゆのうへに しらぬのはらの月をみるかな

522 いはがねのこけのまくらにつゆをきて いくよみやまの月にねぬらむ

旅宿霜

523 そでまくらしもをくとこのこけのうへに あかすばかりのさよの中山

524 しながどりゐなのゝはらのさゝまくら まくらのしもやゝどる月かげ

旅哥

525 たびねするいせのはまをぎつゆながら むすぶまくらにやどる月かげ

旅宿時雨

526 たびのそらなれぬはにふのよるのに わびしきまでもるしぐれかな

屏風のゑに山家にまつかける所に」 87c

たび人あまたあるをよめる

527 まれにきてきくだにかなし山がつつ こけのいほりのにはのまつかせ

528 まれにきてまれにやどかる人もあらじ あはれとおもへにはのまつかせ

ゆきふれる山の中にたび人

したる所

529 かたしきのころもでいたくさえわびぬ」 ゆきふかきよのみねのまつかせ

530 あか月のゆめのまくらにゆきつもり わがねざめとふみねのまつかせ

霧中雪

531 たびごろもよはのかたしきさえく／＼て のなかのいほに雪ふりにけり

532 あふさかのせきのやまみちこえわびぬ きのみもけふもゆきしつもれば」 (88ウ)

533 雪ふりてあととはく／＼かなくたえぬとも こしのやまみちやまずかよはむ

二所へまうでたりし下向に

はるさめいたくふれりしかばよめる

534 はるさめはいたくなふりそたび人の みちゆき衣ぬれもこそすれ

535 春さめにうちそぼちつ／＼あしびきの 山ぢゆくらむやま人やたれ」

雑

海邊立春といふ事をよめる

536 しほがまのうらのまつかぜかすむなり やそしまかけてはるやたつらむ

子日

537 いかにしてのなかのまつのふりぬらん むかしの人はひかずやありけむ」

残雪

538 はるきては花とか見らむをのづから くちきのそまにふれるしらゆき

鶯

539 ふかくさのたにのうぐひす春ごとに あはれむかしとねをのみぞなく

540 くさふかきかすみのたにゝはぐゝもる うぐひすのみやむかしこふらし」 96ウ

海邊春月

541 すみよしのまつのがくれゆく月の おぼろにかすむはるのよのそら

屏風にかもへまうでたる所

542 たちよればころもですゞしみたらしや かげみるきしのはるのかはなみ

海邊春望」

543 なにはがたこぎいづるふねのめもはるに かすみにきえてかへるかりがね

関路花

544 名にしおはゞいざたづねみんあふさかの せきちにゝほふ花はありやと

545 たづね見るかひはまことにあふさかの 山ぢにゝほふはなにぞありける

546 あふさかのあらしのかぜにちるはなを」
山ぢ しばしとゞむるせきもりぞなき

547 あふさかのせきのせきやのいたびさし まばらなればやはなのもるらん

櫻

548 いにしへのくちきのさくら春ごとに あはれむかしと思かひなし

549 うつせみのよはゆめなれやさくらばな さきてはちりぬあはれいつまで」

屏風に春のゑかきたる所を夏

見てよめる

550 みてのみぞおどろかれぬるぬばたまの ゆめかと思し春のゝこれる

なでしこ

551 ゆかしくはゆきても見ませゆきしまの いはほにおふるなでしこのはな」 92c

552 わがやどのませのはたてにはふうりの なりもならずもふたりねまほし

秋哥

553 わがくにの山としまねの神たちを けふのみそぎにたむけつるかな

554 あだ人のあだにある身のあだごとを けふみな月のはらへすてつといふ

山家思秋」

555 ことしげき世をのがれにし山ざとに いかたづねて秋のきつらん

556 ひとりゆくそでよりをくかおくやまの こけのとばそのみちのゆふづゆ

故郷虫

557 たのめこし人だにとはぬふるさとに たれまつむしのよはになくらむ

故郷の心を」 93c

558 うづらなくふりにしさとのおさぢふに いくよの秋のつゆかをきけむ

ちぎりむなしくなれる心をよめる

559 ちぎりけむこれやむかしのやどならん あさぢがはらにうつらなくなり

あれたるやどの月といふ心を

560 あさぢはらぬしなきやどのはのおもに あはれいくよの月かすみけむ」

月をよめる

561 思いでゝむかしをしのぶそでのうへに ありしにもあらぬ月ぞやどれる

故郷月

562 ゆきめぐり又もきて見むふるさとの やどもる月はわれをわするな

563 おほはらやおぼろのし水さゝをみ 人こそくまね月はすみけり」94c

水邊月

564 わくらばにゆきても見しがさめがるの ふるきしみづにやどる月かげ

まないたといふものゝうへにかりを

あらぬさまにしておきたるを見て

よめる

565 あはれなりくもるのよそにゆくかりも かゝるすがたになりぬとおもへば

こゑうちそふるおきつしらなみといふ」

ことを人くあまたつかうまつりしついでに

566 すみのえのきしのまつふく秋かぜを たのめてなみのよるをまちける

月前千鳥

567 たまつしまわかまつばらゆめにだに まだ見ぬ月にちどりなくなり

冬初によめる

568 はるといひ夏とすぐして秋かぜの」（95） ふきあげのはまにふゆはきにけり

はまへいでたりしにあまのもしほ

火をみて

569 いつもかくさびしきものかあしのやに たきすさびたるあまのもしほ火

570 みづとりのかものうきねのうきながら たまものどこにいくよへぬらん

松間雪」

571 たかさごのおのへのまつにふるゆきの ふりていくよのとしかつもれる

572 ゆきつもるわかのまつばらふりにけり　いくよへぬらむたまつしまもり

海邊冬月

573 月のすむいそのまつかぜさえく／＼　しろくぞ見ゆる雪のしらはま

屏風になちのみやまかきたる所」 962

574 冬ごもりなちのあらしのさむければ　こけのころものうすくやあるらむ

深山にすみやくを見てよめる

575 すみをやく人の心もあはれなり　さてもこのよをすぐるならひは

あしにわづらふことありていりこもれり

し人のもとにゆきふりし日よみて

つかはす哥」

576 ふるゆきをいかにあはれとながむらん　心はおもふともあしたゝずして

老人寒をいとふといふ事を

577 としふればさむきしもよぞさえけらし　かうべは山の雪ならなくに

雪

578 我のみぞかなしとは思なみのよる」（命） やまのひたいにゆきのふれゝば

579 としつもあるこしのしらしらずとも かしらのゆきをあはれとは見よ

老人憐歳暮

580 おいぬればとしのくれゆくたびごとに わが身ひとつとおもほゆるかな

581 しらがといひおひぬるけにやことしあれば としのはやくもおもほゆるかな」

582 うちわすれはかなくてのみすぐしきぬ あはれとおもへ身につもるとし

583 あしびきのやまよりおくにやどもがな としのくまじきかくれがにせむ

としのはてのうた

584 ゆくとしのゆくへをとへばよのなかの ひとこそひとつまうくべらなれ」（98）

雑

585 春秋はかはりゆけどもわたつうみの なかなるしまのまつぞひさしき

みさきといふ所へまかれりしみに

いそべのまつとしふりにけるを見て

よめる

586 いそのまついくひさゝにかなりぬらん」 いたくこだかきかぜのをとかな

ものまうでし侍し時いそのほとりに

まつ一本ありしを見てよめる

587 あづさゆみいそべにたてるひとつまつ あなつれぐげともなしにして

屏風哥

588 としふればおひぞたうれてくちぬべき 身はすみのえのまつならなくに」 99ウ

589 すみのえのきしのひめまつふりにけり いづれのよにかたねはまきけむ

590 とよくにのきくのそまゝつおいにけり しらずいくよのとしかへにけむ

屏風系にのゝ中にまつ三本おひたる所

をきぬかぶれる女一人とほりたる

591 をのづから我をたづぬる人もあらば のなかのまつよ見きとかたるな」

かち人のはしわたりたる所

592 かち人のわたればゆるぐかつしかの まゝのつぎはしくちやしぬらん

故郷の心を

593 いにしへをしのぶとなしにいその神 ふりにしさとにわれはきにけり

594 いその神ふるきみやこは神さびて たゝるにしあれや人もかよはぬ」(100ウ)

相州の土屋といふ所にとし九十に

あまれるくちほうしありをのづからき

たるむかしがたりなどせしついでに身

のたちゐにたへずなんなりぬることを

なくく申ていでぬ時に

といふことを人くにおほせてつかう

まつらせしついでによみ侍哥」

595 我いくそみしよのことを思いでつ あくるほどなきよるのねざめに

596 思いでゝよるはすがらにねをぞなく ありしむかしのよゝのふるごと

597 中くにおいはほれてもわすれなで などかむかしをいとしのぶらむ

598 みちとをしこしはふたへにかぐまれり つゑにすがりてぞこゝまでもくる」(101ウ)

599 さりとともとおもふものから日をへては しだいくによはるかなしさ

雑哥

600 いくにてよをばつくさむすがはらや ふしみのさともあれぬといふものを

601 なげきわびよをそむくべきかたしらず よしのゝおくもすみうしといへり」

602 よにふればうきことのはのかずごとに たえずなみだのつゆぞをきける

あし

603 なにはがたうきふしゝげきあしのはに おきたるつゆのあはれよの中

舟

604 世中はつねにもがもなゝぎさこぐ あまのをぶねのつなでかなしも」(112)

ちどり

605 あさぼらけあとなきなみになくちどり あなこゝしあはれいつまで

つる

606 さはべよりくもるにかよふあしたつも うきことあれやねのみなくらむ

慈悲の心を

607 ものいはぬよものけだものすらだにも」 あはれなるかなやおやのこを思

みちのほとりにおさなきわらはのはゝ

をたづねていたくなくをそのあたり

の人にたづねしかばちゝはゝなむ

身まかりにしとこたへ侍しをきゝ

てよめる

608 いとおしや見るになみだもとゞまらず おやもなきこのはゝをたづぬる」(附2)

無常を

609 かくてのみありてはかなき世中を うしとやいはむあはれとやいはん

610 うつゝともゆめともしらぬ世にしあれば ありとてありとたのむべき身か

わび人のよにたちめぐるを見てよめる

611 とにかくにあればありけるよにしあれば なしとてもなきよをもふるかも」

ひごろやまうすともきかざりし

人あか月はかなくなりけりと

きゝてよめる

612 きゝてしもおどろくべきにあらねども はかなきゆめの上にこそありけれ

世中つねならずといふことを人も

とによみてつかはし侍し

613 よの中にかしこきこともはかなきも」(四〇) 思しとけばゆめにぞありける

大乘作中道観哥

614 世中はかゞみにうつるかげにあれや あるにもあらずなきにもあらず

思罪業哥

615 ほのをのみ虚空にみてるあびぢごく ゆくゑもなしといふもはかなし」

懺悔哥

616 たうをくみだうをつくるも人のなげき 懺悔にまさる功德やはある

得功德哥

617 大日 種子よりいでゝさまや形 さまやぎやう又尊形となる

心の心をよめる」(四二)

618 神といひ仏といふもよの中の 人の心のはかものかは

建曆元年七月洪水漫天土民

愁歎せむことを思て一人奉向本

尊聊致祈念云

619 時によりすぐればたみのなげきなり 八大龍王雨やめたまへ」

人心不常といふ事をよめる

620 とにかくにあなさだめなの世中や よろこぶものあればわぶるものあり

黒

621 うばたまやゝみのくらきにあまぐもの やへぐもがくれかりぞなくなる

白

622 かもめゐるおきのしらすにふるゆきの」(106) はれゆくそらの月のさやけさ

ある人みやこのかたへのぼり侍しに

たよりにつけてよみてつかはすうた

623 夜をさむみひとりねざめのとこさえて わがころもでにしもぞおきける

624 かゝるおりもありけるものをたまぐらの ひまもるかぜをなにとひけむ

625 いはねふみいくへのみねをこえぬとも おもひもいでば心へだつな」

626 みやこよりふきこんかせのきみならば わするなどだにいはましものを

627 うちたえておもふばかりはいはねども たよりにつけてたづぬばかりぞ

628 宮こべにゆめにもゆかむたよりあらば うつの山かせふきもつたへよ

五月のころ陸奥へまかれりし人の

もとにあふぎなどあまたつかはし侍」(前2)

し中にほとゝぎすかきたるあふぎ

にかきつけ侍しうた

629 たちわかれいなばの山のほとゝぎす まつとつげこせかへるくるがに

ちかうめしつかう女ばうとをきくにゝ

まからんといとま申侍しかば

630 山とをみるもるにかりのこえていなば われのみひとりねにやなきなむ」

とをきくにへまかれりし人のもと

より見せばやそでのなど申を

こせたりしかへりごとに

631 われゆへにぬるゝにはあらじから衣 やまぢのこけのつゆにぞありけむ

しのびていひわたる人ありきはるか

なるかたへゆかむといひ侍りしかば

632 ゆひそめてなれしたぶさのこむらさき」(1082) おもはずいまもあさかりきとは

やまのはに日のいるを見てよめる

633 くれなるのちしほのまふりやまのはに 日のいる時のそらにぞありける

二所詣下向にはまべの宿

のまへにまへかはといふかはありあめふりて

みづまさりにしかばひくれてわたり侍し

時よめる」

634 はまべなるまへのかはせをゆくみづの はやくもけふのくれにけるかな

相模河といふかはあり月さしいでゝ

のちふねにのりてわたるとてよめる

635 ゆふづくよさすやはせのみなれざるなれてもうときなみのおとかな

二所詣下向後朝にさぶらひども

見えざりしかば」(前々)

636 たびをゆきしあとのやどもりをくゝにわたくしあれやけさはいまだこぬ

たみのかまどよりけぶりのたつをみて

よめる

637 みちのくにこゝにやいづくしほがまのうらとはなしにけぶりたつみゆ

又のとし二所へまいりたりし時はこ

ねのみうみを見てよみ侍哥」

638 たまくしげはこねのみうみけゝれあれやふたぐにかけてなかにたゆたふ

はこねのやまをうちいでゝみればなみの

よるこじまありともの物このうみの

なはしるやとたづねしかばいづのうみと

なむ申とこたへ侍しをきゝて

639 はこねぢをわれこえくればいつのうみや おきのこじまになみのよるみゆ」(III)

あさばらけやへのしほぢかすみ

わたりてそらもひとつに見え侍し

かばよめる

640 そらやうみうみやそらともえぞわかぬ かすみもなみもたちみちにつゝ

あらいそになみのよるを見てよめる

641 おほうみのいそもとゞろによするなみ われてくだけてさけてちるかも」

走湯山に参詣之時哥

642 わたつうみの中にむかひていつるゆの いづのをやまとむべもいひけり

643 いづのくにやまのみなみにいつるゆの はやきは神のしるしなりけり

644 はしるゆの神とはむべぞいひけらし はやきしるしのあればなりけり」(III)

神祇哥

645 みづがきのひさしきよゝりゆふだすき かけし心は神ぞしるらん

646 さとみこがみゆたてぢのそよゝに なびきおきふしよしやよの中

647 かみつけのせたのあかぎのからやしる 山とにいかであとをたれけむ」

法眼定忍にあひて侍し時大峯の物

がたりなどせしをきゝてのちによめる

648 いくかへりゆきゝのみねのそみかくだ すゞかけごろもきつゝなれけん

649 すゞかけのこけおりぎぬのふるごろも おてもこのもにきつゝなれけむ

650 をく山のこけのころもにをくつゆは なみだのあめのしづくなりけり」(112)

那智瀧のありさまかたりしを

651 みくまのゝなちのを山にひくしめの うちへてのみおつるたきかな

みわのやしるを

652 いまつくるみわのはうりがすぎやしる すぎにしことはとはずともよし

賀茂祭哥」

653 あふひぐさかつらにかけてちはやぶる かものまつりをねるやたがこぞ

社頭松風

654 ふりにけるあけのたまがき神さびて やれたるみすにまつかせぞふく

社頭月

655 月のすむきたのゝ宮のこまつばら」(115) いくよをへてか神さびにけむ

神祇

656 月さゆるみもすがはのそきよみ いづれのよにかすみはじめむ

657 いにしへの神世のかげぞのこりける あまのいはせのあけがたの月

658 やをよろづよもの神たちあつまれり たかまのはらにきゝたかくして」

伊勢御遷宮のとしのうた

659 神かぜやあさ日の宮のみやうつし かげのどかなるよにこそありけれ

述懐哥

660 きみがよになをながらへて月きよみ 秋のみそらのかげをまたなむ」(116)

太上天皇御書下預時哥

661 おほきみの勅をかしこみちゝわくに 心はわくとも人にいはめやも

662 ひんがしのくにゝわがおればあさ日さす はこやの山のかげとなりనికి

663 山はさけうみはあせなむ世なりとも 君にふた心わがあらめやも」

建暦三年十二月十八日」〔115ウ〕

かまくらの右大臣家集」〔116オ〕

原 状

87 原 状

- 三六 さりとともとーと右傍小字朱
 四〇 やとりをーを消シタ上ニ書ク
 四一 たてりとーて右傍
 四二 あはとーとはノ上ニあはト書クカ
 四三 いとまなみーま補入
 四四 よるのころもにーの右傍朱
 四五 ふくかぜもーも汚レアリ
 四六 なきさのー月よミセケチ、なきさトスル
 四七 とひこゆるーひ右傍小字
 四八 さむみーみ右傍
 四九 えにしあればーに右傍
 五〇 はつせ山ーつ右傍
 五一 第五句ナシ、空白
 五二 第五句ナシ、空白
 五三 まてにとーに補入、朱書カ
 五四 めまによせてしのふるこひー一行行間書入
 五五 あひてあはぬこひー六字消シタ上ニ書ク

- 四三 詞 月のまへこひー一行行間書入
 四四 詞 ものへーとノ上ニのヲ書ク
 四五 人こそー人ノ次とミセケチ
 四六 へぬらむーぬ消シタ上ニ書ク
 四七 いはかきぬにーママ
 四八 旅宿霜ー一行行間書入
 四九 あらぬさまにーに右傍
 五〇 かはりゆけともーは右傍
 五一 いてぬ時にーに以下数字分空白
 五二 なとかーか補入
 五三 大日 種子ー一字分空白
 五四 かへるくるかにーママ、リトアルベキカ
 五五 はまへの宿ー宿以下数字分空白
 五六 このうみのーの右傍
 五七 こけおりぬのーこけ右傍
 五八 あまのいはせのーママ、とトアルベキカ